

平成 24 年 4 月号

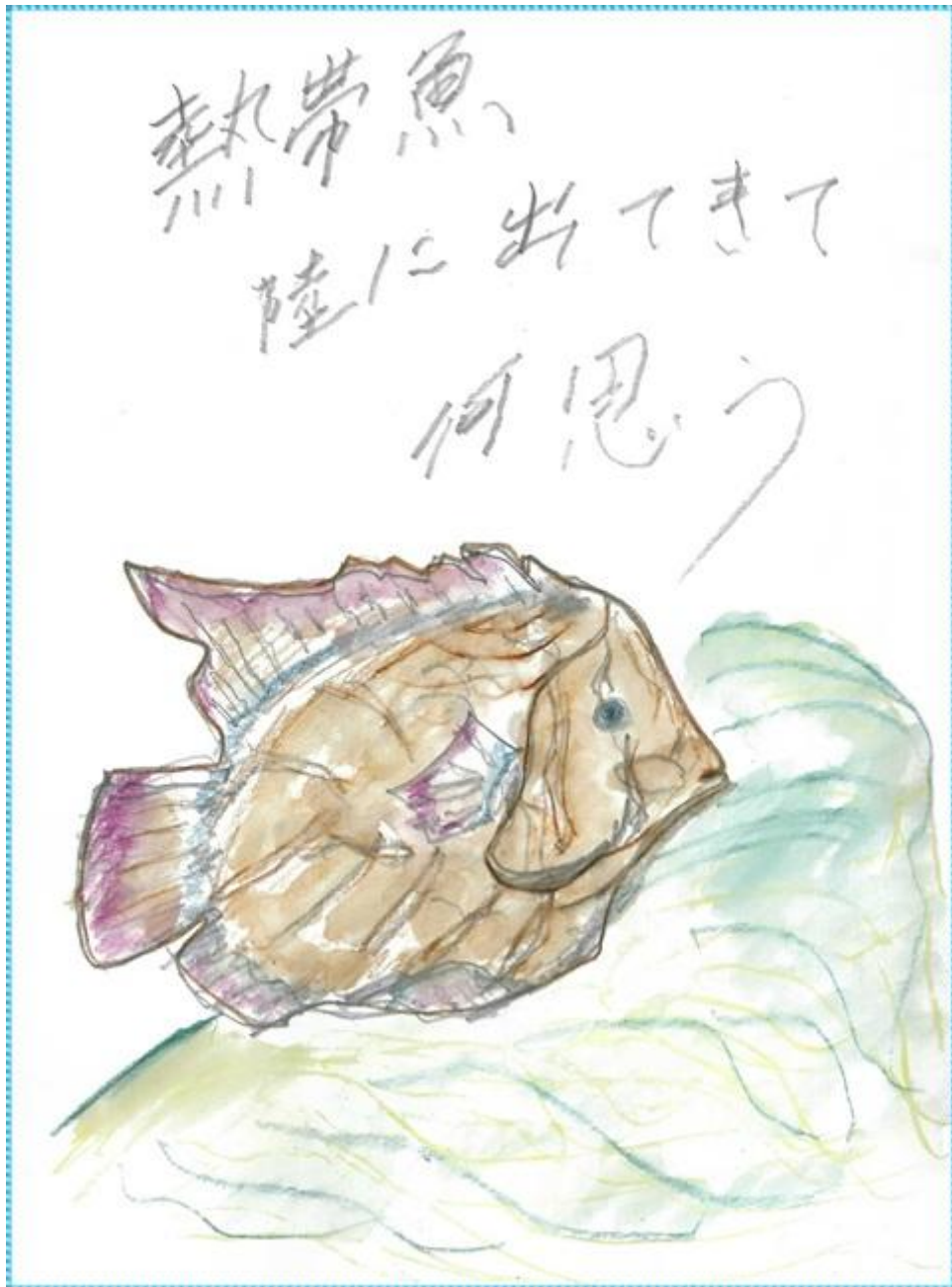
メンバー、ボランティア、学生  
みんな仲間!

# けやきと仲間 めーる



心の病と闘っているメンバーと大学生の協働の会 NPO 法人「けやきと仲間」

平成 24 年 4 月 1 日(第 84 号)



作:山本 雄三

## スプリングフェスティバル



3月4日はスプリングフェスティバルに参加しました。けやきはウクレレやマリンバ等を演奏しましたが、客席からも歌声が聞こえるなど、暖かい雰囲気の中無事にやり遂げることができました。

## バスハイク

3月16日はボランティアのエレーナさんの送別会も兼ねたバスハイクでマザー牧場に行きました。走るバスの中で「バイクの鍵付けっぱなしだった」とスタッフに慌てて伝えに来て運転手さんに「走行中に車内を歩くと、道路交通法違反で捕まりますよ」と注意された人、「さあ弁当だ」という時に、「バスの中に薬を忘れた!」とバスに戻り、運転手さんをようやく探してバスを開けてもらい、一安心した人、皆でお弁当を食べた後に焼き肉を食べに行った人、こっそりお酒を飲んだ人、こぶたのレースで見事に一等を当て、大きなぬいぐるみをゲットした人もいました。



戦利品のぬいぐるみ

## 詩

### 公園

陽だまりのベンチに座って  
青空を見上げる  
今日はいい天気だ  
なんて平和なんだろう

身体が戦っているのに  
心が痛んでるのに  
そんな苦しみ  
ひととき忘れましょう

夕方になれば  
元気な子供が遊ばれる  
この公園で  
僕はひとり座っている

スプリングフェスティバルや土曜市で詩集を販売させていただいた Y さんより以下のお礼状を頂きました。

「今回は僕の趣味程度で書いていた詩をこのような作品にして下さり、ありがとうございます。

O さんも素敵な挿絵を描いてくださりありがとうございます。小さな花も灯に当たると、花は花なりに輝くものです。病んだ心もそんな灯に当てて、誰もがかそけくも輝くといいと思います。」(Y.H)

## リレー小説

### 第3話

「なにそれ。樹の精？ そんなもの気のせいよ」

そう言うと女はさっさと歩き出した。その背後から慌てた声があがる。

「待ってよ先生、僕なら先生の悩みを聞いてあげられるよ」

「子供に大人の何が分かるの」

女は足を速めてその場を離れた。こんな手あいは放っておくに限る。しばらく駄々をこねる声が聞こえていたが、やがて聞こえなくなった。

四つ角を曲がると、右手に椿の垣根に囲まれた公園が現れた。その先には生徒が補導された警察署が見えている。

女の頭の中では、さっきの子供の言葉が何度も繰り返されていた。

『先生が教育について行き詰ってるの、僕知ってるよ』

行き詰まり。そんな風に自分を思ったことは無かった。教頭が投げかけてくる言葉のうち、不要な部分はカットして生徒に伝える。その分、成績がどうのと嫌味を言われないう、生徒にはキッチリ勉強してもらわなければならない。

(けど、それって当然でしょう？ 世の中に出たら理不尽なこと、やりたくなくてもやる仕事はたくさんあるわ)

そう、上手くやってきたはずだった。なのに「万引きした不良生徒」などという者が現れてしまった。

(私ってついてない……こんなハズレくじを引くなんて。バレないようにやるか、私と関係無いところでやってくれば良かったのよ)

そう、自分は悪くない。やり方を変える必要もない。このことを生徒には良く分かってもらう必要がある。そう結論づけた頃には、警察署は目の前だった。

深呼吸して自動ドアをくぐる。これから警察官に何と言われるかを考えると頭が痛かった。

「あの、青木さんでいらっしゃいますか？」

「はい？」

不意に呼びとめられて振り向くと、黄色い旗を持った婦警が子供を抱えて立っていた。見覚えのある子供だ。

「私、子供の下校を見守る係なんですけれど。この子が『迷子になった、お母さんが警察署にいる』って言うので連れてきました」

女は絶句した。婦警の手を離れ、自分に抱きついてきた子供は、さっきアレクなんとかと名乗った子供だったからだ。

「えーん、お母さーん！」

「私にこんな子供はいません！」

突然の大声に、通りがかった人が何事かと振り返っていた。

(第3話 担当：Y. 次号に続く)